

日本の医療文化を考えてみよう!!

日本の医療文化と
「Nurse Practitioner」

5 動的思考でNPをとらえてみよう

連載
寄稿

(毎週水曜日)

大阪大大学院医学系研究科
医療経済産業政策学教授

田倉智之

今回は、「医療技術」を構成する手段と資格を分けてNPの導入を論じることの意義をお話ししました。今回は、NPなどの資格の設計をどのように進めるべきか考えてみましょう。

■ 動的な検討の考え方は

医療システムなどは、技術の進歩や環境の変遷に合わせて過去から未来に向けて「動的」に検討を行うことが理想であることを前回の最後に述べました。つまり、医療を取り巻く社会動向の流れに沿って、走りながらいろいろな物事について議論を行い、

資格などの制度を必要に応じて組み上げていくことが求められるわけです。なぜそのような状況になるのかと言えば、健康意識の高まりや関連制度の疲労などを背景にしつつ、医療分野は技術のイノベーションが活発であるの同時に、医療制度に対する変革のニーズが大きくなってきたことが挙げられます。

さて、ここで注目しなければならぬキーワードは、「走りながら」と「いろいろな物事」の2つになります。「時間」と「多様」という言葉にも置き換えられるこれら特徴的なキーワードで表現されるケースでは、システム論を展開するにあたり、現象を把握し影響を評価するのに「動的なモデル」が必要となります。少し難しいお話になりますが、もう少し掘り下げてみると、医療システムの全ての事柄が例えば数年前から何も変化せず、また対象となる資格には複数の職種も多く、医療技術も関わらないのであれば、立ち止まり過去の状況のみを参考に議論を行うことが可能になります。このような状況は、一般に「静的なモデル」と呼ばれ、議論は非常にシンプルになり、簡単に結論を見いだすことができる場合が多いようです。

もちろん、NPの議論はこれとは異なり、一筋縄でいくものではありません。で、いわゆる動的な検討が必要になります。ちなみに、この動的な検討はまさに、道なきジャングルの中で車を運転しながら関係者が合意点を探り、人がまたがった自転車(例えば新たな資格)を下ろして走らせようとするのと似ているのかもしれない(例えば悪いかもしれないが)。なお、ここで1つ強調すべきことは、事故を起こさなければ車に乗っている人々は後ろをふり返るよりも、前方に多くの注意を払う必要があるということです。すなわち、動的な検討とは時間軸に対して未来志向であり、多様な影響要因に対してバランスを取ることが求

められることとなります。

■ 動的な検討による効果とは

ここまで、動的な検討のイメージについてお話をしましたが、その期待される効果にはどのようなものがあるのでしょうか。結論を述べると、その最も大きなものに、先ほども述べた未来志向の議論が行われることが挙げられます。例えば、このような姿勢による検討が進むことで、対象となる資格の発展性を担保することが可能になります。逆に、静的なモデルを無理に当てはめて、過去のみに傾注して資格の条件設定を行ってしまうと、将来に向けてその職種が持つ潜在的な進化の可能性を押しさえ込んでしまう危険があります。やはり、資格の設計においては、臨床現場の需要や環境の変化に即して職種が能力を適合させつつ、しなやかに伸びる余地を与えるよう配慮をすべきと思われれます。

さらに期待すべき内容を挙げるとしたら、資格に関わる多様な事象も取り込んで包括的な検討をできることが考えられます。医療制度に関わる議論は、今後、ますます重層化していくと推察され、国民の医療に対する関心や患者の診療ニーズに始まり、医療技術の高度化や医療サービスの提供体制、医療従事者の教育・研修など、資格に関与する要素は挙げたらきりがありません。動的な検討とは、これら多次元の要素も加味しつつ全体を最適化する解を探ることが狙いとなりますので、合意形成(医療文化を排したネゴシエーション)のツールとしての期待も高いと考えられます。なお、1930年代のシエンハマーという学者などによる「動的平衡・生命は絶え間ない流れの中にある動的なものである」という言葉が最近はやっておりますが、このコンセプトの中に含まれる「機能は動きながらバランスを取る」や関連する「多

様性のない世界は脆弱である」は、ある意味、動的な検討にもつながるお話と思われれます。

さて、医療文化をも意識しつつ、医療システムの価値を向上させるためにNPをどのように論じるべきか、5回にわたる整理を試みました。それを一言で表現するならば、過去のしがらみにとらわれることなく、患者の健康改善や医療制度の発展のために、NPの理念を関係者が創成していくことが望まれる、となります。繰り返しとなりますが、医療技術の発展は今後も止まるところを知らず、有限の社会資源をより効率的に活用する圧力が強まる中、患者や国民の意識も日々変遷をとげておりますので、医療従事者と患者・家族の関係も中期的には変化をしていくことになるに違いありません。特に、プライマリケアなどは、その変化が顕著に表れる分野と推察されます。そのような流れの中にあつて、評価がある程度定まった米国のNPも、将来どのような姿になっていくのか、個人的には興味があるところであり、今後、NPという資格の議論をわが国で進めることがあれば、このような面も視野に入れたつつ、建設的な議論が進むことを期待してやみません。

profile 田倉 智之氏 Takura Tomoyuki

1992年に北海道大大学院工学研究科を、2006年に東京女子医科大大学院医学研究科を修了し、外資系経営戦略ファームのMG、大阪大医学部の招聘准教授などを経て、10年より大阪大大学院医学系研究科の医療経済産業政策学教授、現在に至る。医療価値などの研究の傍ら、経済産業省のHFSP制度評価や内閣府の少子高齢化の財源再建に関する国際共同研究などの委員、また日本人工臓器学会や日本心臓リハビリテーション学会の評議員を歴任している。